

平成 21 年度大台ヶ原自然再生推進計画評価委員会
ニホンジカ保護管理部会（第 2 回）
議事概要

日時：平成 22 年 2 月 9 日（火）

13:30～16:30

場所：奈良県文化会館多目的室

出席者

1. 委員

柴田 叡式	名古屋大学名誉教授
高橋 裕史	(独) 森林総合研究所関西支所生物多様性グループ
高柳 敦	京都大学大学院農学研究科 講師
田村 義彦	大台ヶ原・大峰の自然を守る会 会長
鳥居 春己	奈良教育大学付属自然環境教育センター 准教授
村上 興正	元京都大学 講師
横田 岳人	龍谷大学理工学部環境ソリューション工学科 准教授

2. 関係機関

鳥谷 和彦	近畿中国森林管理局三重森林管理署 流域管理調査官
山上 悟	奈良県農林部森林整備課
西峰 淳	三重県環境森林部自然環境室
畠中 源治	吉野きたやま森林組合総務課長
福西 貢	奈良県獣友会上北山支部 会長

3. 事務局

佐々木 仁	近畿地方環境事務所 統括自然保護企画官
杉田 高行	近畿地方環境事務所 国立公園・保護整備課長
上村 邦雄	近畿地方環境事務所 野生生物課長
櫻又 涼子	近畿地方環境事務所 自然保護官
濱名 功太郎	吉野自然保護官事務所 自然保護官
樋口 高志	(株) 環境総合テクノス 環境グループ マネジャー
荒木 良太	(財) 自然環境研究センター 第一研究部 部長代理
藤田 曜	(財) 自然環境研究センター 第一研究部 研究員

【平成 21 年度個体数調整について】

○くくりわなに対するシカの警戒心はどの程度あるのか。

⇒自動撮影カメラによる映像をみると、わなが設置してある場所をまたぐ他、後退りするなどの行動が確認された。

○くくりわなに対する警戒心を確認するには、同一のわなにかかる個体が減ってきたかどうかをチェックすればよい。自動撮影カメラの行動をみるよりも統計的なデータを見た方がはつきりする。わなに対する警戒心があるのであれば、わなの場所を変更する。何日程度で捕獲できなくなるかの検証をすると、わなによる捕獲で 1 箇所にかける設置期間を決める際の参考になり、捕獲の効率化につながる。くくりわなを用いた捕獲について、獣友会の意見を聞きたい。

⇒わなは最初金属のにおいがしてシカに気づかれるので、そのにおい消しが重要になる。

また、見回りを毎日行うと人間の臭いが付いて警戒されることも考えられる。

○装薬銃は選択的にメスが捕獲できる。捕獲数を検討する場合、今後はメスの捕獲に基づいたシミュレーションが必要である。メスに特化した捕獲であれば何頭捕獲すればよいのかという検討も今後は必要である。全体の捕獲数が少なくてもメスを多く捕獲すると効果があるはずなので、次年度以降検討した方がよい。

⇒シミュレーションの際、過去の実績はオスメス、齢を考慮していたが、シミュレーションの方法も含めて今後検討する。

○くくりわなの設置期間について、通年という言葉を使うと一年中設置していたと誤解される。実際はドライブウェイ開放期と閉鎖期の両方で設置を行ったという意味なので、そのことをわかるように書いた方がよい。

○資料 2-2 の 4 ページにくくりわなによる捕獲方法の例として記述してあるが、全域で捕獲する場合どういう形で行えば効率が上がるのかを含めて書いた方がよい。くくりわなの設置場所の移動や GPS データの活用など、検討事項を整理した方がよい。例で挙げたものが実現可能なのかを検討した文章があるとよい。

○装薬銃での捕獲場所が川上辻周辺に集中しているが、そのあたりにシカが多いということか。

⇒今回の捕獲実施期間中は霧がひどく、スコープを除いても全く見えない状況が多かった。川上辻のあたりは霧が薄く狙いやすかった。

○ハンターとしては天気が良い日を選んで当日決めて狩猟に行くと聞くが、そうすればまだ効率は上がると思うか。

⇒それもあるが、全体的にシカの目撃数も少なかった。

○装薬銃による捕獲を行う場合には、捕獲はできなくても発見頭数を記録していくようにしてはどうか。装薬銃による捕獲の具体的な方法については請負業者と獣友会で話し合って詰めていく必要がある。

○冬期にシカがないのであれば、その時期に捕獲を行うメリットが低いということも言

える。自動撮影ビデオの撮影状況と捕獲状況の関係を見れば、その検討に使えるのではないか。

⇒湿度が高い時期や氷点下になる時期は機材が動かなくなる場合もあり、冬はうまく撮影ができないことが多い。

○目標捕獲頭数の100頭でどれだけの予算がかかるのか、1頭当たりいくら費用がかかるのかについても、個体数調整をする上で重要になってくる。その中で費用対効果を高める戦略を考える。今すぐは無理であろうが今後は考えていかなければならない。

○植生の保全を考慮すると、大台ヶ原でニホンジカが何頭ぐらいの生息密度で維持できればいいのか検討が必要である。ミヤコザサがある限りシカは残るので、ミヤコザサの管理も必要になってくる。

【生息密度調査について】

○メッシュ単位での評価について、生息密度が低下したと書いてあるメッシュについては低下と言えるかもしれない。しかし、増加したというメッシュについては、年変動も大きいので増加という表現はまだできないのではないか。

○メッシュ単位で説明するのではなく、東大台・西大台で書き分けた方がよい。

⇒三津河落山はメッシュでは西だが、シカの行動としては東が多い。メッシュが荒いので簡単に西と言えるものではない。

⇒シカの行動ではなく、人間の考えている区分があるため、それに応じた区分をした方が分かりやすい。管理区分をどうするかという検討が必要である。

○東大台・西大台で分けるよりも、ミヤコザサ林床の有無で分けた方がよい。西大台は餌資源がほとんどない。今回西大台で生息密度が高かったのは、餌となる木の実などを求めて一時的に集まっていただけではないか。餌資源がどう分布しているのかがわからないと、シカの生息密度の増減の要因について議論できない。

○防鹿柵とシカの生息密度の関係が記載されているが、防鹿柵は以前からもあるものなので、今年の生息密度の増減の要因を防鹿柵というのであれば、今年シカの密度が急増した理由を以前からある防鹿柵を原因というのは非科学的である。

○局所的な捕獲が局所的な効果をもたらすは疑問である。生息密度は大台ヶ原全体で考えなければならない。

⇒生息密度の増減について、何が影響しているかを検討するには材料が少なく時期尚早である。評価委員会では、結果のみを示し、考察は今後のワーキンググループで検討していきたい。

○mesh9で生息密度が増加した原因を考えたとき、昨年木の実の成り年で偶然起きた可能性もある。このことについては検討が必要である。

○調査は秋にされているため、シカの縄張りなども関係する可能性もある。

- 経年的な木の実の状況を見ているわけではないが、今年はトチノキの成り年だった。
 - いつの時期を生息密度の評価のターゲットにするのか、季節変化を追っていく準備をしていただきたい。
 - 糞粒法を行うのは秋が望ましいので秋の生息密度を出す。実際に植生に影響を与えるのは夏なので、その時期の生息密度との相関を見るなど、夏の生息密度の把握は今後の課題である。
 - 生息密度に関する今後の課題について、整理したものを資料に追加する。
- ⇒資料3に今後の課題ということで整理する。

【GPS首輪による個体移動状況調査について】

- 資料4で今回はGPS個体の標高データと積雪量の関係の図が5個体分しかないが、平成17年度の個体と平成21年度の個体についても同様に解析をする必要がある。

【平成22年度「ニホンジカ個体群保護管理」実施計画】

- 図3のニホンジカの生息密度とミヤコザサの稈高との間に相関があるかもしれない。植生タイプIと植生タイプIIは同様の傾向を示し、下がる直線になるが、他のタイプはそうならない可能性がある。同じ生息密度であってもミヤコザサの稈高に差があるかもしれない。
 - 生息密度と捕獲数の関係について、捕獲によって生息密度が低下傾向にあることがいえない書き方になっている。
 - 捕獲の意義について、現在の書き方だと矛盾がある。捕獲をしていて個体数が減っているのであれば意義があるので、捕獲の継続を行う必要があるというように修正する。
 - ミヤコザサ稈高のデータは、菅沼先生が過去に大台ヶ原の中で実施している調査があるはずである。報告もされていると思うので、今の状態との比較として参考にするのもよい。
 - ミヤコザサの稈高とシカの生息密度の関係は、森林生態系部会とニホンジカ保護管理部会が連携して検討することが望ましく、両方の部会から意見をもらえるとよい。
 - 森林生態系部会ではシカの生息密度の話はでてこない。どちらかというと森がどう更新するのかということと、生物多様性の維持の話が中心で、シカの餌資源としての植物がどのくらいどこに分布しているのかが抜けている。そこは評価しておかないとシカの生息密度との関係を論じようすると行き詰ってくる。この評価をしないと説明がつかないことが多いので、森林生態系部会でも議論する方向で検討してもらう。
 - 餌植物の量を把握しておかないと正確なことがいえなくなってしまう。
- ⇒そこまで正確なものではなくていい。量が多い少ない程度のものなので、科学的な因果関係を出すのは難しい。

以上

(文責:近畿地方環境事務所)